

平成 28 年度スーパーバイザーによる学校教育支援事業報告書

研究テーマ

「心が働く学びあいの創造」～基礎・基本の定着と活用する力の育成を目指して～

八頭町立 八頭中学校

スーパーバイザー：（所属）大阪教育大学 （氏名） 木原俊行 （職名） 教授

1 はじめに

本校は平成 27 年度に町内の 3 つの学校が統合して発足した新しい学校である。生徒数は 500 人弱で比較的大規模な学校である。素直で純朴な生徒が多く、落ち着いた学校生活が送れている。教員の指示にはよく従うが、積極的に授業に参加し意見を述べ、考えを深めているとはいいがたく、どちらかというを受け身的な学習になってしまう生徒が多いように思われる。また不登校傾向の生徒も少なからずあり、学習困難な生徒が登校を渋る傾向が多くみられる。これらの原因が生徒や家庭だけにあるわけではなく、我々教員の授業づくりに課題があるのではないかと考える。

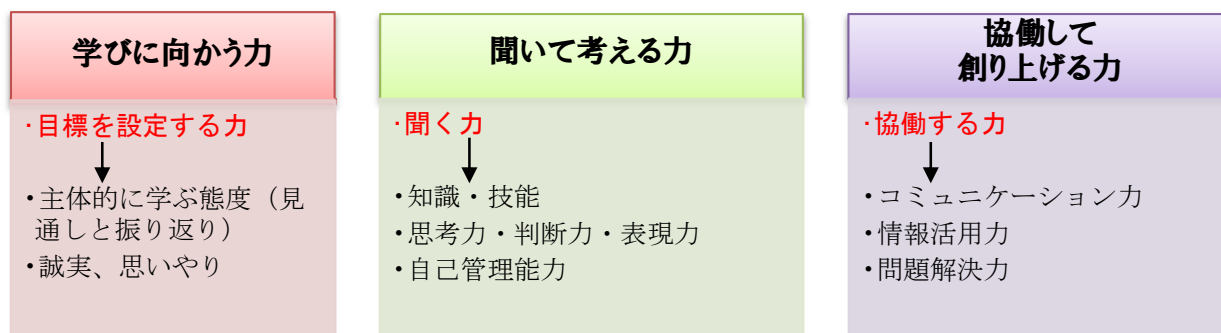
27 年度から「心が働く学びあいの創造」という研究主題で取り組んできているが、28 年度はそれをさらに発展させ、生徒同士が関わり合いながら学びを深められる授業改善に取り組んでいきたいと考えた。そうすることで学習がより理解しやすくなり、人と関わることで自己の存在意義を感じられる生徒が増えるのではないかと考えた。

2 研究構想図

（1） 学校教育目標



（2） 育てたい資質・能力



3 研究の方向性

- ① 生徒にとって学習意欲の湧く本時目標を導入で示し、まとめではその時間で身につけた力を振り返る場面を設定。
- ② 教科の授業に於いて習得と活用の場面を明確に分け、習得した知識を用いて言語活動に取り組み思考力・判断力・表現力を育成。
- ③ 学級活動や道徳での話し合い活動を充実させ、スキルとしてのコミュニケーション能力を育成。

4 研究内容

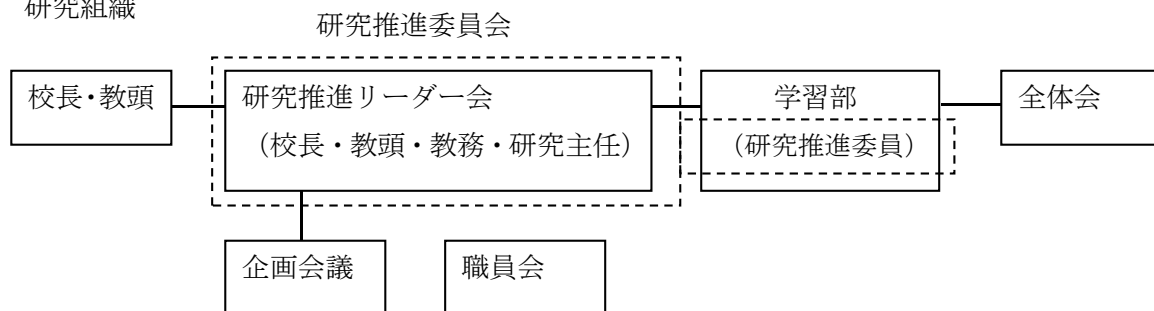
(1) 理論研究

- ・生徒の実態把握
- ・思考力・判断力・表現力が身につく言語活動の理論研究

(2) 実践研究

- ・理論研究に基づき、研究授業・互見授業を行い、生徒の変容を分析する。
- ・言語活動を積極的に取り入れた授業を継続的に実践する。
- ・学活や道徳で話し合い活動を定期的に行いコミュニケーションスキルを身につける。
- ・基礎・基本の定着を目指し、家庭学習の習慣化を図る。

5 研究組織



6 研究計画 (年間)

4 月 今年度学校研究計画の決定 (校内PT研究会)

(研究主題、主題設定の理由、研究の方向性、研究内容)

4 月～8 月 実践研究 ○27年度の取り組みをベースに

6 月 理論研究 ○生徒の実態を分析 (諸調査を本に)

7 月 理論研究 ○活用型学習のあり方について (講師招聘) ○校内授業研究会①

理論研究 ○校内PT研究会 (分掌より)

8 月 1学期の反省と2学期の具体的な取り組みについて

理論研究 ○校内PT研究会 (分掌より)

9 月～12 月 実践研究 (教科研究、互見授業の実践)

11 月 校内授業研究会② (講師招聘)

1 月 校内授業研究会③ (講師招聘)

2 月 校内PT研究会 (本年度のまとめと来年度に向けて)

7 研究内容

(1) 授業研究会の持ち方

3、4 限	授業者 2 名ずつ	木原先生による授業参観
5 限	授業者 2 名	木原先生と全教職員による授業参観
6 限～4：45	研究会	KJ 法などによる振り返りと指導講評

(2) 各研究会について

①第 1 回授業研究会（7 月）

授業者：西垣靖子（2 年音楽）

- 内 容：・前時までに学習したことを踏まえながら、3 人の指揮者による演奏を聴き比べ、ベートーヴェンの思いを表現するためには、どのような音色，速度，強弱がふさわしいかを改めて考え、レーダーチャートに記入する。
- ・レーダーチャートをもとに自分のイメージと合う演奏を選び、どういう点でふさわしいと感じたのか意見交流し共有する。



反 省

- ・レーダーチャートが効果的に使われ、生徒の考えをまとめたり、伝えたりするのに有効であった。
- ・ipad で生徒のワークシートを全体シェアできた。
- ・ワークシートがとても工夫されていた。
- ・生徒が意見交換になれており、積み重ねがなされていることが伝わった。
- ・振り返りシートが工夫されており、学びがたどれる。
- ・目標が明確に提示されていた。
- ・班の話し合いで隊形やバインダーなどが工夫されていた。

授業者：西川 和広、村田耕一（1 年数学）

内 容：分配法則を活用して式を簡単にすることができる。

このとき、

- ①全員が、1 年 5 組のみんなに分かりやすく、自分の言葉で、「同類項をまとめて式を簡単にするには、具体的にどのような方法を使う」のかを説明することができる。
- ②全員が教科書 p 67（問 2）～p 68（問 4）を解くことができる。
- ③評価問題を自分の力で解ける。



反省

<数学>

- ・教え合いが定着している。
- ・自己申告の評価が可視化されていて、生徒も自分の位置が分かるし、緊張感もでる。
また、誰の所に聴きに行けばよいか周りの生徒も分かる。
- ・指導案の中で学び合いに触れるべきではないか。
- ・個々がどんな説明をしているかも取り上げてやってもよいのでは。
- ・正しい説明が出来ているのだろうか。聞く生徒は理解できているのか。
- ・低位の生徒でもついていける授業だ。
- ・よく話が出る。
- ・1時間の見通しが持てる授業である。

②プロジェクトチーム研究会（8月）

（1）木原先生の講義「習得型と活用型の授業の考え方」

○習得型授業のコツ

1. 目標や評価基準の明示
 2. ポイントの分かりやすい説明
 3. 反復練習で定着
 4. 授業中の小テスト
 5. 学習形態の多様化
- （個→ペア→グループ→全体→個）

○活用型授業のコツ

1. 多様な解が認められる学習
2. 思考、表現をさせるための時間の確保
3. その視点やモデルの提示
4. 資料や道具の質的・量的充実
5. 学習形態の多様化
6. 教科横断的授業

（2）1学期の各自の取り組みを用いたポスターセッション

1学期に各自が取り組んだ習得と活用型の授業を統一したワークシートのまとめ、お互いに説明や質問をしあう時間を設定した。



このセッションを通して、2学期以降の授業づくりの視点を以下のようにまとめた。

1. いろんな答えが導き出せる問題の提示
2. 人の意見を聞くことで、できなかったことができるようになる経験をさせる
3. 人と話すことで自分の考えが変化したり、深化する場面を設定
4. 習得した技能を用いてアウトプットする場面を設定
5. 本時目標と振り返りの関連付けを図る

③第2回授業研究会（11月）

授業者：上田陽子、Riley Adam（3年英語）

内 容：Living in Yazu is better than in Tokyo. について理由とともに自分の意見を書くことができる。

授業者：西村公秀（3年技術）

内 容：・グーグルの自動運転から場面を切り取り、どのような条件分岐があるか考えよう。
・コースからはみ出さずにビュートレーサを動かしてみよう。
・必要な命令を結んで、プログラムを作り、シミュレータを動かそう。

2016.11.14

同僚間で密に意見を交換してアクティブ・ラーニングの実践を推進



鳥取県八頭町立八頭中学校では、今年度、「心が働く学びあいの創造～基礎・基本の定着と探求的な学びを目指して～」という研究主題が設定され、授業研究等によって教師たちが研鑽を積んでいる。7月に続いて、本日も授業研究会が企画・運営された。英語と技術の研究授業が並行して実施され、それぞれの授業を題材とする協議をおこなわれた。また、それを活かして、各教員が自身の授業改善の方途を考えるタイムが

設定された。この中学校の校内研修は、同僚間で密に意見を交換してアクティブ・ラーニングの実践を推進している、校内研修の好事例である。

11:28 PM in 学校の実践研究, 実践研究会 | [Permalink](#) | [Comments \(0\)](#)



木原先生のホームページより



木原先生からの指導

- ・生徒同士、生徒と教員間に学びの基礎力となる良好な関係ができています。
- ・黒板と電子黒板の併用で分かりやすい説明となっており、生徒の理解を促している。
- ・複数の新聞の社説の比較やわが町と京都の比較など、「比較」というのは深い学びを生む。
- ・教科横断的な取り組みを行ってほしい。

④第3回授業研究会（1月）

授業者：橋本圭左（1年道徳）

- 内 容：・モラルジレンマの対立軸に沿い、自分の立場を明らかにして思考する。
・話し合い活動を通して、それぞれの価値や意味について、思考を深める。



- 反 省
- ・電子黒板と板書を併用した説明で物語の内容をわかりやすく説明できた。
 - ・導入時に伝統工芸やバイオリンづくりを説明するパワーポイントが用いられていて、生徒は物語にスムーズに入れた。
 - ・多様な学習形態が用いられていて、生徒は人の話を聞いて自分の考えを再構築する場面が何度もあった。
 - ・モラルジレンマにするのであればやはりそれ専用の作品を用いるべきであった。（対立が起きにくい作品であった。）
 - ・生徒対生徒でなくても生徒対先生の対立でもよかった。

授業者：岡田 靖（2年理科）

- 内 容：・電流がつくる磁界と電磁誘導についてまとめよう。
・電流が流れる原理を説明しよう。



- 反 省
- ・日常用品（電動歯ブラシ）を提示することで、本時の学習課題（既習内容を活用する場面）を、生徒が明確に理解することができていた。
 - ・班の活動では、用意された器具を適切に使い、試行錯誤しながら実験を繰り返す姿が見られてよかった。
 - ・班の活動では、生徒ひとりひとりが距離が近く、主体的に、積極的に学習に取り組んでいる様子が見られてよかった。
 - ・ホワイトボードを使って原理の説明をする場面があったが、既習の語句をどう使えばいいのかなど、説明をするための注意点を提示すれば、より深い理解につながったのではないかな。

8 成果と課題

1. 目標や価値基準の明示（本時目標と振り返り）

		そう思う		どちらかといえばそう思う	
先生はその時間の目標を示している	全体	70.7	56.4	26.2	40.6
	1年	66.4	52.6	27.0	42.2
	2年	75.6	65.0	22.6	32.5
	3年	69.4	51.0	29.3	47.7
		7月	2月	7月	2月

7月の生徒アンケートより2月の数値は下がってしまった。教員の反省としては、多くの者が本時目標を示し、振り返りを行っていると思っていたが、生徒の受け止めとの間にずれがあることが分かった。4月は共通理解できていたが時間が経つにつれ教員間での意識のずれが生じていたであろう。また目標の表現の仕方や、評価の仕方も統一したものがなく、来年度への課題であると考えます。

2. ポイントの分かりやすい説明

2学期より全教室に電子黒板とタブレットが導入され、多くの教員によって運用されており、生徒にとって分かり易い授業展開ができるようになってきている。

ただし、使用環境はまだ不十分で、タブレットと電子黒板の接続が使用中に途切れたり、タブレットの音声電子黒板につながらないなどの不具合が頻繁に生じる。教員の不慣れが原因の時もあるが、環境整備を整える必要も感じている。今後も研修会を開き、使用方法の理解を図ってきたい。



3. 学習形態の多様化



個人、ペア、トリオ、4人組、全体など様々な学習形態を用いた取り組みが広まっており、この点に関しては成果が上がっているようである。

		そう思う		どちらかといえばそう思う	
「分からないから教えて」と言える	全体	38.9	54.6	33.8	35.7
	1年	44.5	51.1	33.6	40.0
	2年	42.7	60.5	30.5	29.9
	3年	29.9	51.7	37.6	37.7
		7月	2月	7月	2月

		そう思う		どちらかといえばそう思う	
話し合い、教えあいは学習意欲を高める	全体	41.5	47.6	46.9	40.6
	1年	46.7	47.4	38.7	41.5
	2年	47.6	48.4	43.3	37.6
	3年	30.6	47.0	58.0	43.0
		7月	2月	7月	2月

「分からないから教えてといえる」「話し合い、教えあいは学習意欲を高める」のいずれの生徒アンケートにおいても、良好な結果がでた。特に3年生の数値の伸びが大きく、受験に向かって個人で頑張るというよりも、話し合ったり教え合ったりする方が学習には効果があるであろうことがこの結果からうかがえる。

4. 多様な解がみつめられる学習・教科横断型の学習

この二つのテーマに関してはまだまだ取り組みが不十分である。多様な解に関しては国語、数学、音楽などでは取り組みやすく進んでいるが、他教科では足りていない。また、教科横断型となると全く未開拓であるといえる。理科で過去、に学んだ要素を取り入れて、数学の問題に応用する方法は取り入れているが、同じタイミングで複数教科を行き来しながらの授業展開はできていない。これに関してはカリキュラムマネジメントを学び、応用しながら来年度以降取り組むべき課題である。

9 おわりに

木原先生には習得・活用型授業の理論をご丁寧に指導していただき、基本的な考え方を理解することができた。また、その基礎となる学びに向かう力として、生徒同士の関係や教師との関係性についてもご指導いただいた。我々が目指していることが間違いではないことを確信できたし、活用型の授業を創造していくためには個人の努力だけでなく、教科部会や学年の組織的な取り組みが必要であることも気付けた。今後は更に取り組みを深化し、生徒の思考力や表現力を高める取り組みにつなげていきたい。

